

## 着任一年を振り返って、雑感



日本銀行金沢支店  
支店長 大川 真一郎

昨年6月に着任して1年が経とうとしています。住めば都と言いますが、支店長会議等で東京に向いた後、金沢に戻ってくると「帰ってきた」と思うようになりました。土地勘がつくにつれ、仕事上も、北陸や石川県の経済全体の動きの中で個別企業の活動を理解し易くなっているのを感じます。ただ、本稿では、経済分析というよりも、もう少し生活目線での雑感を徒然に書いてみたいと思います。

金沢で1年生活してみて、まず思うのは、城下町の伝統文化を程良くビジネスに昇華させているなということです。美術や工芸含め、物づくりの伝統技術を維持・高めながら、現在のコト消費の時流にあわせ、その体験を売るという側面に乗り出しています。元来有している強みを継続させる一つのあり方のように感じます。インバウンド客を含め、体験好きの観光客には、強く思い出に残り、評判が評判を呼ぶ好循環が生まれるでしょう。

一方、「伝統的」あるいは昔から「在るもの」に対しては、若者を中心に、ともすれば古臭いとかつまらないと感じるものです。若者に聞けば、一度は東京や大阪に住んでみたいと答える由。石川県から若者が流出する事態を防ぐにはどうしたら良いかという問いに「ピタリとはまる答えは無いように思いますが、金沢で1年生活してみて、ぼんやりと鍵は「動き」の創出かなと感じるようになりました。もちろん、魅力的な仕事場の提供とか、手厚い子育て支援等が重要なのはその通りなのですが、常に新たなイベントが開催されているとか、見たことも無い物が出現するとか、ワクワク感の連鎖が必要のようない気かしています。

この点、金沢には、所々に「動き」を確保し易い仕掛けがみられます。例えば、金沢港クルーズターミナルには展望デッキを含め、コンサートや学生・市民の活動等に自由に使える広いイベントホールがあります。たまに覗くと、ヨガをしているかと思えば、プロ歌手のコンサートが開かれていたりします。新しい風を呼び込み日常に刺激を与える良い仕掛けだなと感じました。2階から対岸や隣岸を眺めていると、夕方には通称「キリン」と呼ばれるクレーンが夕闇の中に優美に照らし出されて、ふと東京のお台場を思い出しました。対岸まで橋をかけて、観覧車を置いて等と想像していると、「金沢のお台場」が浮かんできます。夢物語かなと思いましたが、その昔、かの地には粟ヶ崎遊園なる施設があったようで、人の見る夢は、古今東西同じかと妙に納得しました。

経済調査という仕事柄、金沢を離れて、能登の地域にもよく出向きます。プライベートでも青柏祭の迫力に圧倒されました。着任する前には気がつかなかった事として、「祭りの効用」があります。祭りの実施に至るまでのコミュニケーションや、祭りに参加した者に共有される同志感、地元の経済活動を活発にし、防災や警備等の生活上の共助の精神を支える大きな要素になっていると感じます。能登に限らず、石川県の至るところで祭りが継承されてきた意義に触れ、経済の語源「世を治め、民を救う」との結びつきの強さを感じました。

徒然に書いてきましたでしたが、字数制約がありますので、この辺りで区切りとさせて頂きます。伝統の良さを生かしつつ、新時代の流れに柔軟に対応していく市町の歩みに興味は尽きません。これから出会う驚きに期待しつつ、2年目の生活を過ごしたいと思っています。